

滋賀の災害

滋賀県の地震

県下に震源地があり、大きな被害のあったものとして、

文治元年（1185）7月9日 びわ湖中及び

北西畔

正中2年（1325）10月21日滋賀県北部

寛文2年（1662）5月1日 びわ湖西岸

明治42年（1909）8月14日 姉川地震

郡志に被害状況など記述されているものとして、

正中2年・元徳3年・天正13年（東浅井

郡志）文禄5年（栗太郡志）文政2年（高島郡

志・神崎郡志稿）

文政7年（蒲生郡志）

滋賀県内を震源地としておこる地震の多くは「内陸性地震（直下型地震）」である。これは地下にある岩盤が圧縮されることなどによって、

蓄えられたエネルギーがある限界に達すると、

岩石が壊れたり、地層がずれたりしておこると

いわれる。

これらを「断層」といい、200万年前から現在

にまでにつくられ、今まで何度か活動して地震

を発生させた。県内にこの「活断層」がたて・

よこ無数に走っている。県内を走る活断層は、

比良山地をはさんで、西に花折断層（30キロ）

比良断層（16キロ）があり、湖北に柳ヶ瀬断

層や集福寺断層（13キロ）がある。

語り継がれる洪水の歴史

びわ湖に流入する河川は支川も含め「級河川

は本県の川が流れこんでいる。

奈良時代に都の造営のために大量の森林が伐採されたと伝わる田上山は、明治にいたるまで、

たびたびの大洪水で大量の土砂を流出し、大戸

川は土砂で埋まり、瀬田川の河床を上げてきた。

びわ湖の水の流出口が塞がれたことで、びわ

湖沿岸は冠水による被害を受けてきた。

記録に残る最古の災害は寛正元年（1460）6

月に発生した栗太郡での大洪水があり、江戸時

代には慶長13年（1608）、17年（1612）19

年（1614）に畿内が大洪水に見舞われている。

さらに明治時代には約30回、大正時代には1

0回の洪水の記録が残る。とりわけ明治29年

（1896）9月の大洪水の爪痕は県下各地に残り、

その被害の大きさを伝える。

未曾有の水害の記録

明治29年6月には記録的な豪雨に見舞われ、

県下各地で大きな被害が発生し、田畑の流失や

土砂の堆積の様子をみるに、再起不能とばかり

に土地を離れて、北海道や遠くはカナダなどの

海外に移住した人も少なくはなかった。

降雨の状況は「まるでロープのような雨」と

記された記録が残り、まさに大豪雨の様子を伝

えている。びわ湖の水位は3、76メートルに

達し、湖水が逆流して、各地の河川の破堤に伴

う浸水と相まって、県内ことごとくが湖面と化

していった。

建設省琵琶湖工事事務所の記録では、年間降

雨量の約半分の1730ミリが6月2日頃から12

日にかけて集中し、未曾有の大洪水による被害

は、死者22名、流失及び全壊家屋176浸水

面積は14800ヘクタールに及んだ。

（財）滋賀県文化振興事業団発行

湖国と文化より

在所ばなし

（野洲町広報に掲載された寺井秀七郎先生
の文を編集）

南北桜

藤原定家が「桜の山の春のあけぼの・・・」

とうたった桜山と、三上山との間に大山川とい

う川をはさんで北桜・南桜の二つの大字がある。

桜という地名は全国に二十一、「燃えてあが

るは桜島」から「青葉繁れる桜井の里」までい

れると七十八、多くは山地である。

「桜山花咲き匂ふかひありて・・・」と平安

朝歌人がこの地の桜を愛でた歌もあるにはある

が桜というのは花の桜でなく神の名である。

山を掌る神を大山ツミノ神といい、その娘を

木ノ花サクヤ姫といった。

南桜の野蔵神社も、北桜の若宮神社もすべて

この女神をまつる。

日本の祖神は高千穂の峯に、この地の祖神は

三上の峯にご降臨。山は信仰だけでなく、山を

ぬきにしては、古代人の生活は語れない。

南と北とは結婚できないということとは、

同神をまつる間柄だからというなら「行畑

・北・上屋」「妙光寺・辻町・竹生」「入町・

桜生」も同じである。

実は木ノ花サクヤ姫よりも、父の大山ツミノ

神が邪見なのである。これが2村の結婚の邪魔

をしている。

大山川は浅い低い山から流れでているのに

大山川と言うのは、この父なる神の名である。

この川は、昔は菩提寺蹟などと一連の禿山から走りだす天井川だけに、暴れ者であった。

いまも川幅より広い両岸、補強された堤、県の

砂防指定地であることをみてもわかる。

いまも、この川がきたら両村の美田はも

ちろん人家の大半が水没する。人家はまるで避

難体制をとっているかのように、山肌によりそっ

ている。氾濫の時、一方の堤が切れることによっ

て一方がホットする。宿命である。

また日照りつづきで田養水不足のときは、リ

バーはライバルの語源をなすとおりである。

今は山々に木も繁り、また野洲川ダムもでき

て水のなやみは消えたが昔は水の争いほど凄惨

なものではなかった。祖先は、神の名に於いて縁

組をさげさせ、水論が水論以前のものに及ぶこ

とをおそれた。これは祖先の叡智の所産である。

狭い山あいの天地で、血の濃くなるのを防ぐ

優生学的見地と、耕地の細分を防ぐ経済的意味

も付加されて、神の言葉として伝えたのである。

しかし2村は、川をはさんで対峙する呉越の

国ではなく、共同の故郷をもつ、いわば権司・

善司の伝説をもつ同根の二つの枝である。

大山川を眼下にする形勝の阿麻山に、百足山

本明寺がある。平凡社の大百科事典に載ってい

る本町唯一の寺がある。今は廃寺であるが、石

段に昔がしのばれる。ここが両桜発祥地と伝説

されている。

こうして山に発祥した両桜の人は、里に住ん

で一川を互いの命の水として暮らし、やがて大

山川畔の墓地に背中あわせてねむる。一からで

て一に帰る、まことに俱会一処。